英国春秋

2014年　　秋号
ISSUE　　No. 25
発行　　英国日本人会

はじめに

今年も庭のコスモスが咲いて文集、秋号発行の季節がやって来ました。この花はその可憐な姿に似ず、宇宙、秩序・世界・万有などと大それた意味合いをもっているのが、少々不似合いな気がしないでもありません。
今号は特集に“旅”を組みました。さすが、“宇宙への旅”の紀行文は時期尚早かなというところでしたが、“世界の旅”の紀行文は各所からのが届きました。カリブ海、中近東、USA, インド、フランス、イギリス、日本からなどで秋号は“旅”一色に染まってしまいそうになりました。

夏の終わりは何となく切なくさせる時期ですが、こんな折、二つの悲報が届きました。お一人は会員のペイン瑠美子さん、もうお一人は会員トロロープ礼子さんのご主人、チャーリーさん、JA 会員一同、お二人のご冥福を心よりお祈りしております。

生前、瑠美子さんは歌を詠まれていました。コンサートにもよく出かけられ、マエストロ達との出会いを、興奮気味に語られていたのを思い出します。

　　コスモスの疎らに残る道端に　小布施の秋は静かに暮れゆく　　瑠美子

チャーリーさんは身体も大きいが、ハートはもっと大きい方でした。よくバザーのお手伝いをして下さいましたが、その時のあの笑顔が忘れられません。

『英国春秋』秋号、第２５号が完成しました。原稿をお送りいただいた会員の皆様、そして特別寄稿をいただいたゲスト・ライターの方々、大変ありがとうございました。
次回は来年春号、今からお願いして、「鬼に笑われてもよい」ので、一人でも多くの皆様が投稿して下さるのを期待しております。

特別寄稿　マークス寿子氏（文筆家・元秀明大学教授・元エッセクス大学講師）
　　湯浅茂雄氏　　（実践女子大学下田歌子研究所所長・同大学文学部教授）
（アイウエオ順）

＊＊＊＊＊　　も　く　じ　　＊＊＊＊＊

旅について	マークス寿子	３－　４
Dream Holiday	Herman Valentiner	５－　７
英国春秋歌壇　　川面のひかり	バロウ典子	８
キプロス難民取材紀行	加藤節雄	９－１０
むかし、むかしの旅の話	田村陽子	１０－１１
英国春秋俳壇	俳句同好会	１２
下田歌子	湯浅茂雄	１３－１４
英国春秋俳壇　　さくらんぼ	エリオットつや子	１５
デカン高原を行く　アジャンター・エローラ石窟	小川のり子	１６－１７
お祖母ちゃん家の朝御飯	ビドル　恵	１８－２１
私のどうぶつ物語	矢嶋蓉子	２１－２２
1066 年・ウイリアム征服王の故郷を訪ねて	岡村光雄	２３－２５
「旅」の記憶	津久井安子	２６－２７
インドへの旅	オハロラン美和子	２８－３０
英国春秋歌壇　　旅の終わりに	ペイン瑠美子	３１
Scotland Decided		
一日本人の見たスコットランド独立キャンペーン	野口善男	３２－３３
英国春秋あれこれ		３３

旅について

マークス寿子

30 歳すぎてイギリスに来るまで旅らしい旅をしたことがなかった。私の若い頃は観光旅行やホリデイに行くような時代ではなかった。疎開や、父の勤務の都合での引っ越しはたびたびあったが、それは旅とは呼べないだろう。唯ひとつの旅は高校の修学旅行で熊本へ行って阿蘇山の噴火口まで行ったことである。その翌週に阿蘇山が大噴火を起こしたから、忘れられない旅となった。

LSE に職を得て、イギリスに来たのが初めての海外旅行だった。日本からイギリスへただ移動するのではなく、Fact 発見の旅行にしようと LSE に申請したら、その頃の大学は寛大で研究費を出してくれた。それまで私の研究テーマは「西欧の東洋進出」だったから、旧植民地を見聞するのは当然の研究旅行となった。まだアメリカ占領下だった沖縄から始めて台湾、香港、カンボジア、タイ、シンガポール、インドと飛行機を乗り継いで 3 週間かけての旅は本当に「学びの旅」だった。タイではいくつもの寺院を見たし、インドではタージマハルにも行ったから、観光もしたのだが、何といっても面白かったのは「人間」だった。人々とその生活だった。壮大な建物や美しい風景よりも、町やマーケットで会う人たちとのおしゃべりが楽しかった。「英語」の重要さもよくわかった。それ以来、「旅」は私の大切な学習となった。

ロンドンに腰を落ち着けた後も時間とお金が許すかぎり旅をした。しかし、いずれも観光ではなく、人に会い、町を見る旅行だった。まだ共産圏だった東ベルリンへチェック・ポイント・チャーリーを通って入ったのや、東ドイツを友人と車で横断したのも‘Cold War’を体で感じた（本当に恐ろしいとしか言いようがない体験だった）貴重な旅だった。

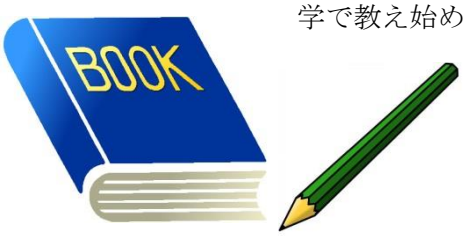
結婚後、外へ働きに出ることはいろいろな事情でできなかったが、85 年にエセックス大学に現代日本研究所が開かれて、私もメンバーとして日本語や日本文化を教えるようになった。初めは週 2 日だけだったが、だんだん忙しくなって週 4 日ロンドンからコルチェスターへ通うようになると、夏冬の休暇がいかに大切かわかった。特に、冬は休暇を待ちかねて日光浴の出来る場所へ逃げ出した。友人に誘われてカリブ海の島バルバドス、一年中夏の国、でクリスマスと正月を過ごすようになった。

バルバドスの小さな飛行場に降りるや、熱い空気と素晴らしい南国の花の香りが体を包んで、後にしてきた暗く冷たいイギリスとは大違いだった。今から 30 年ほど前のことだから、まだ観光客は少なく、設備もなく、細いでこぼこ道をドアも屋根もない車で走っていると、歩いている人が話しかけてくるのだった。「へーイ、マン、ハウ　ユアードゥイング」と知らない人がみんな呼びかけてきた。この島は 1969 年まで英国の植民地だった。アフリカから移動した黒人の中でも最も大人しい人々だったと言われているが、その故か、独立後も反英的なところは少しもなく、むしろカリブ諸島で最も親英的で、イギリス人のマスターたちがかって持っていたイギリス人の習慣を島人たちは今もきちんと守っているのだった。午後のお茶や日曜日に正装して教会へ行くのがそれだった。サトウキビ畑(産物はサトウキビしかない）の中の細い道を黒人の一家が男はスーツにタイ、帽子で、女はドレスにハイヒール、そしてきれいな帽子も冠って、子どもたちも同様に着飾って教会へ歩いて行く姿はまるで絵のようだった。旅行者のほうは T シャツに半パン、ゴムぞうりなのだから。

その頃のバルバドスははっきりとした階層社会で、黒人と現地人の白人とでは住む地域も違うし、職業も違っていた。白人はホテルやレストランやゴルフ場やガソリンスタンドなどを経営し、黒人はホテルのメード、清掃員、庭師、ゴルフ場の整備員などの仕事についていた。海に出てトビウオなどの漁をするのは黒人の男たち、マンゴ

ーやポポーをマーケットで売るのは陽気な黒人女性たちだった。トビウオが大漁の時には、只でもいいから持って行きなと掛け声をかけていて、ほんとうに安くて美味しかった。私は友人の離れを借りていて小さいキッチンがあったから、トビウオの塩焼きとカリフォルニア米のご飯で満足だった。

星空の下でビキニ姿で祝うクリスマスは楽しかったが、4−5 日もすると飽きた。イギリスやアメリカから来る金持ちの避寒客はゴルフとパーティで毎日を送っていた。あっちのパーティ、こっちのパーティと、ほぼ同じ顔触れが集まって、ゴシップとラム酒とダンスで夜中まで過ごすのだった。パーティ嫌いの私はなるべく家にいて、ミステリを読んでいた。
3 年間ほどは毎クリスマスをバルバドスで過ごしたが、それで私の社交生活は終了して、寒いロンドンでのクリスマスに戻った。
本を書くようになって、休暇はすべて日本での仕事に充てられたし、その後は日本の大学で教え始めたから、ホリデイとは縁のない生活になった。日本とイギリスの間を年 4 回往復すれば、ひたすら家で休むのがホリデイだった。日本国中、行かない県はないほど飛び回ったが、それはすべて講演のためだった。講演の前後に観光案内をして貰ったり、名物をご馳走になったりしても、ゆっくり鑑賞できるものではなかった。



この頃でも知り合いのイギリス人に「ホリデイはどこへ行くの」とよく訊かれる。その度に私は答える。「毎日がホリデイです。ホリデイは自宅で過ごします」。
若い時でもホリデイや観光旅行が楽しめなかったのだから、ましてや 80 歳に近い今、空港や観光地の混雑を経験したいとは思わない。そんな体力もないし、時間もない。時間？時間はあるが、遊び歩く時間はない。これからの人生の限られた時間を、人生という長い旅の締めくくりとして使わなければならない。人生の旅は終わろうとしているが、どのように終わるか、終わらせたいか、私にもはっきりとはわからない。それは誰に尋ねることも出来ないし、教えて貰えることでもない。
日本で、イギリスで、世界で起きている多くのことは必ずしも人間の進歩や発展を示すものではないように見える。人間の知恵が深まったとも、徳が高まったとも思えないことが多い。そんな社会で、もう私には関係ないと周囲を見ないで暮らすのもひとつの生き方である。
しかし、私はそうはなりたくない。心静かに、ゆったりと暮らしたいと思う気持ちもあるものの、もっと強くあるのは、最後まで世界で起きていることを、人間のやっていることを知っておきたいという気持ちである。知ってどうすることが出来るわけではないが、それでも目を見開いておきたい。
もちろん、そんな希望は叶えられないかもしれない。病気によっては読むことも見ることも聞くことも難しいかもしれない。それでも、叶うことならば、生きている最後まで自分なりに考えることを止めないで生きたい。知ることで、絶望したり、腹を立てたり、苦しんだりするかもしれないが、それが人間というものではないか。とすれば、私は最後まで人間らしく生きたいと願うのだ。

旅の終わり――それは暖かい、安全なホームに戻ることを意味する。終わりまで私なりの旅を続けて、力を尽くして行きたいものである。

THE DREAM HOLIDAY IN AMERICA THAT ENDED BEFORE IT BEGAN

Herman Valentiner

It was going to be a dream holiday. We both wanted to see the real America, the vast expanse of land that lies between the two great oceans: the Pacific the Atlantic. My wife Masue-san booked the trip early on with Treyn Rail Holidays, a reputable travel company based in York. The first destination was San Francisco, which we both knew well. From there we were going to board the Amtrak train to go south through California and then across the border into Nevada en route to Las Vegas for a 3-day stay in a luxury hotel. After a visit to the Hoover Dam we would head east through Colorado to the magnificent Grand Canyon. After spending time in the Canyon we would change to the Durango to Silverton Railroad, to go across the National Forest and then go by coach from Silverton to Grand Junction, still inside Colorado. After an overnight stay there we would then be transported by the Rio Grande Railroad across the mighty Rocky Mountains to Denver for a 2-day stay.

There we were going to meet and have dinner with a cousin of mine, Benedicte Valentiner, who lives in New Mexico. She has just published a book on her life in Washington D.C., working for four U.S. presidents as manager of Blair House, the Presidents' Guest House, which is situated next to the White House. From there the train journey would continue across the Continent to Chicago, where we would be staying for another 2 days, and then go to Niagara Falls, which I feared would be a considerable disappointment after having spent time many years ago at the Victoria Falls in Africa and the Iguazu Falls between Argentina and Brazil. The trip would end with a 3-day stay in New York City, which would not be nearly enough for us. But Masue would at least be able to say that she had been to New York, and she would have the photographs to prove it !

On the 18th September we set off on our British Airways flight from Heathrow and arrived late the same day in San Francisco. We were taken to our hotel, the Holiday Inn in the centre of the city and had an early night. The next day we joined our group and went on a sightseeing tour of the city with our travel guide Tricia. San Francisco is a lovely city, and the weather was perfect: warm and sunny ! We walked up and down some of the many hills on which the city is built, and which gives it its special character. We saw the beautiful old houses that had survived the big earthquake in 1907, and we walked past the multitude of museums, theatres and concert halls built during the years after the earthquake. We had a quick lunch at the famous Fisherman's Wharf before boarding a boat that whisked us across the harbour to Alcatraz, the rocky island in the Bay where so many prisoners had spent years of their lives, and we caught a look at the spectacular Golden Gate Bridge, a popular suicide spot.

After getting back to our hotel late in the afternoon we went out for dinner at a nearby Portuguese restaurant, from which we returned at about 9 p.m. in preparation for the next day's train journey south through California. Masue-san was in the bathroom brushing her teeth when suddenly I heard a thump and could see her collapse on the floor, the toothbrush still in her hand. She seemed lifeless !! I immediately realized what had happened: As she did not respond she had obviously suffered a stroke !! I carefully pulled her into the bedroom and laid her on the carpet. Then I called the director of the hotel and asked him to call an ambulance. He came to our room very soon afterwards, and within minutes the ambulance arrived, along with a fire engine, and the room was quickly filled with medics, asking questions, and firemen. They came to the same

conclusion that I had come to: Masue had suffered a stroke ! She was taken by ambulance through the deserted streets to San Francisco General Hospital, where she was immediately examined and then despatched by the same ambulance to the California Pacific Medical Centre, a modern private hospital specializing in neurological disorders, where a team of neurosurgeons stood ready to operate. I was amazed by the efficiency and speed at which things were happening. This could not have happened nearly as quickly in the U.K.

After an MRI scan of Masue's brain the surgeons did not waste time in making the diagnosis: She had suffered a sub-arachnoid haemorrhage, in which an aneurysm in the front of her brain had burst. This is different from an ischaemic stroke, which can cause paralysis of one side of the body. But it is usually much more serious, and many people do not survive it in the U.K. This is because of the time it takes for people to be admitted to hospital, examined and operated. Perhaps it was Masue's good fortune that her stroke happened in San Francisco. Had it happened on the train half way through America she would probably not have survived. The experienced neuro-surgeons in the California Pacific, a mixture of American, Chinese and Koreans, did what they were trained to do. One informed me that it was necessary to drill a hole through the top of her skull and insert a tube in order to remove blood that had flowed out into her brain and was threatening to destroy it. Another surgeon proposed to insert a tube into her groin going all the way into her brain in order to coil the aneurysm and stop the bleeding. Furthermore this tube would be used during the next few days and perhaps weeks to introduce vital medicines into the affected area of her brain in order to combat vaso-spasms. These regularly occur in patients with sub-arachnoid haemorrhages and can sometimes prove fatal if not treated during the first critical weeks. I gave my consent immediately to these two procedures. The first procedure began around midnight and lasted about two hours. The second procedure started shortly afterwards. After they had been completed the surgeons called me in and explained what they had done, and what they would be looking out for during the coming critical days. That gave me enormous confidence and hope. They told me to go back to the hotel and get some sleep and come back the following day.

The nurses (specialists in neurology) were from England, and they were all extremely kind and helpful. One of them advised me to telephone one of my daughters and ask her to fly over from London to help me cope with the situation. I took her advice, and my daughter Karin (who has lived in San Francisco) agreed to fly to San Francisco, and she arrived four days later. Her support during the following week proved to be absolutely essential. I visited Masue every morning during the next two weeks, in time for the doctors' rounds starting at 10 a.m.

Almost every day they found it necessary to carry out different interventions to help her on the way to potential recovery. At one stage she developed a high temperature because of a lung infection, which meant that she was given antibiotics and an ice blanket. She wore an oxygen mask and was breathing through a ventilator, and she was initially fed intravenously. She developed a bad itch all over her body, which made her very uncomfortable. She was able to move both her arms, which she did continuously. At night the doctors would often telephone me to the procedures they considered necessary. obtain my consent to the procedures which they considered necessary. They were particularly concerned because of the vaso-spasms, but by introducing medicines into her brain they managed to keep the spasms under control.

During the day I tried to book into a less expensive hotel, but it turned out that every single hotel in San Francisco was fully booked because the Americas Cup was taking place that week. In the end the Holiday Inn offered me a preferential rate for as long as I needed to stay. The management and staff were incredibly understanding and helpful. However, after two weeks in San Francisco I had run out of medicine to reduce my blood pressure, which had reached a catastrophic level. In the USA you cannot purchase prescription medicines unless you are registered with a G.P. And that is both time-consuming and expensive. I therefore had to make the decision to fly back to London and to leave Masue in the care of the doctors at the California Pacific. On the 4th October I returned to London Heathrow.

Her treatment in intensive care was costing a fortune, but the American insurance company with whom Masue was insured never once quibbled about covering the rising expense. Of course they were anxious to repatriate her to England as soon as it was safe to do so. But it took six weeks for the hospital to agree to her repatriation. This was finally done by air ambulance on 31 October. The weather was stormy at the time, and I was very concerned for her safety. The day before the flight she underwent a tracheotomy, and her ventilator was removed. Her head was shaved. It was a two-day flight, with a stop-over in New York. There was a doctor on board the small plane, just in case.

She landed at Heathrow late the next day and was admitted to the National Hospital, Queen Square, the foremost Neurological hospital in London. She spent the first few days there in intensive care but was later transferred to a general ward, where she was expertly looked after by no less than three Japanese nurses, one of whom was Nori Matsuyama, who has 10 years of neuro-surgical experience. This enabled Masue to speak a few words in Japanese for the first time ! However, her stay in Queen Square was limited to 3 weeks. During that time we had to find a NHS rehabilitation hospital, of which there are only four in London, with beds for only about 100 patients in total. Rehab hospitals are therefore in huge demand everywhere, and the waiting lists are long ! When the 3 weeks were up she was transferred on a temporary basis to our local hospital in Barnet (which does not cater for neurological cases), while she was waiting for a spare bed in a rehab hospital. After 3 weeks the Royal Free Neurological Rehabilitation Centre in Edgware agreed to admit her on a 3 months' placement. We were in luck ! In this small establishment she was given physiotherapy and also a certain amount of speech and language therapy on a regular basis. She continued to make slow progress in some areas but her speech continued to be slurred, and she still finds it almost impossible to swallow. I believe she would have benefited from more intensive therapy. But perhaps the doctors and the therapists did not believe this would have been cost effective, in view of her very slow progress. Before they discharged her after four months in the hospital they ordered two different braces for her left leg, which had become extremely stiff, and also special shoe with in soles.

Then she was transferred to a private nursing home, The Fernbank, in Finchley, which my daughter Kirsten and I had found for her, and which had been recommended by the Care Commission. It is a small and homely place, and the manager and staff are Africans. They are kind and caring, but they do not employ trained nurses or physiotherapists. She has her own room on the 1st floor but spends most of the day downstairs in the communal lounge. It is good for her to be with the other patients, all elderly, even if she is unable to speak to them. There is a TV on most of the day, and Masue likes watching TV ! The nursing home welcomes visitors, and she gets frequent visits from her many friends in the Japan Association, and also from our neighbours. They have brought her little books and magazines, as well as a CD player and discs with popular Japanese songs. These visits are very stimulating, and hopefully they will continue.

It is very hard to make a prognosis as to how long it will take before Masue's condition will improve sufficiently for her to return to her own home in Finchley, and to what extent this has to be adapted so that she can be treated and looked after at home. First of all it will be necessary to construct a stair lift so that she can move up to the 1st floor for access to her own bathroom and bedroom. Then a ramp will have to be built at the back of the house, giving her easy access to the garden. Trained nurses will have to visit her on a daily basis and also at night to make sure that her every need is always met. It is difficult to say if she will ever be back to what she was, back to normality, and if her memory will ever be restored. But there is always hope for some recovery, over time.

英国春秋歌壇

川面のひかり

バロウ　典子

散策の　庭のはずれに　ふと見えし
テームズ川の　川面のひかり

しののめの　暗き内より　ほのぼのと
天地分かるる　時の好まし

丘に立つ　木々の小枝を　照らし出し
赤い夕日が　沈みてゆきぬ

草原を　大いなるもの　歩むが如く
草なびかせて　風渡りたり

異国にて　日本祭りの　″わっしょい″の
耳に残りて 今も聞こゆる

夕ざれば　オレンジ色に　灯を点す
海辺の町は　世界同じに

つくばいに　屈まりおれば　足るを知る
心おのずと　入り来るやも

宇宙より　帰りし人の　言の葉は
”　わがふるさとは　地球なり”　と

ひらひらと　つがいの蝶の　舞い遊ぶ
何にあらねど　心楽しき

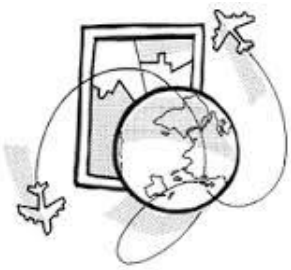
いそいそと　花生けにけり　陶芸の
子の手になりし　その花生けに

キプロス難民取材紀行

加藤節雄

旅と言えば大分昔の話だが、私には苦い経験がある。

地中海にあるキプロス島に 1974 年にトルコ軍が侵攻、島の北半分を占領して北キプロストルコ共和国を設立した。島の北部に住んでいたギリシャ系の住民は難民となって南のキプロス共和国へと逃れ、難民キャンプでの生活を余儀なくされた。私は日本の雑誌の仕事でキプロス島へ難民取材に行くことになった。



ロンドンからの直行便はあったが、東京～ロンドンの南回りのパキスタン航空(ＰＩＡ)の往復切符の「復」の部分が残っており、いずれにしても取材後には原稿と写真を日本へ届けなければならないので、このチケットを使うことにした。ＰＩＡにはキプロス直行便がないので、シリアのダマスカスへ飛び、そこからキプロス航空でニコシアへ飛ぶことにした。私のロンドン～東京のチケットはカラチ経由なので、ＰＩＡのロンドンオフィスでロンドン～ダマスカス～カラチ～東京に変更してもらい出発となった。

飛行機は順調に飛んでいたが、そろそろアダマスカスというころになって、問題が発生した。乗務員が私のところへ来て、ダマスカスが天候不良で着陸出来ないので、ドバイに向かうと言う。窓から外を見ると良い天気で茶色の大地が広がっている。疑ってもしょうがないので黙っていると、また乗務員が来て、今度はバーレインに向かうと言う。この辺から何かおかしいと思い始めたが、乗務員は「バーレインからダマスカス行きの便の手配をするので心配しなくて大丈夫」というだけである。どうなるのかと心配しているうちに、結局、「バーレインでの着陸許可が下りないので、カラチに向かうことになった」と言う。

冗談ではない。カラチはすでに日本への半分の距離である。乗務員を捕まえて説明を求めたが、カラチからダマスカス行きの便はたくさんあるので、問題ないと言うだけである。しかし、カラチに着くのは夜中である。その日の便がなければ一泊しなければならない。切符の手配は？ホテルの手配は？ホテルまでのトランスポートは？と、かなり事態は緊迫してきた。乗務員は「空港のＰＩＡデスクに行けば全て準備出来ている」と言う。

疑いながらも飛行機はカラチ空港に着陸した。暑い。熱気が空港を覆い、物凄い数の人がラウンジにいて、何やら大声で怒鳴っている。全てがケイオティックで雑然としている。肩から手のない裸の子供が金をくれとせびってくる。人相の悪い男が荷物を運んでやると言ってスーツケースに手をかける。ＰＩＡデスクを探したがない。空港の職員とか警備員の姿も見えない。

全身汗だらけで重い荷物や写真機材を持って、ようやくＰＩＡデスクを見つけたが、予想通り、私のことは何も聞いていないという。これからが大変だった。ここで引き下がったら何も出てこないし、第一に取材が出来ない。私の切符はカラチ～東京となっているので、明日東京へ飛べと言う。全く埒が明かない。業を煮やし、ほとんど喧嘩腰にマネージャーを呼んでもらい、事情を説明、マネージャー氏はいったん奥の事務室へ引き下がったが、しばらく待たされてから、ホテルの手配と翌日のダマスカス行きの飛行機の切符を手配してくれた。たぶん、ロンドンからの飛行機のキャプテンに連絡を取ったか、あるいは「日本のジャーナリストがわめいているが、うるさいので言う通りにしよう」と言う判断だったのかもしれない。

結局大騒ぎの末、翌日ダマスカスへ戻り、キプロスへ飛んで、難民取材は成功、毎日グラフの６ページを飾った。

ちなみに、何故ロンドン発の飛行機がダマスカスに着陸しなかったかと言うことに関しては、飛行機の中でも、カラチの空港でもちゃんとした説明

をしてくれなかった。私の想像するに、多分、ダマスカスで降りる乗客は私一人、また乗り込む乗客もいないと言うことで、多分通過してしまったのではないかと今でも思っている。着陸料を払わずに済むからか、燃料節約か分からないが、テロ対策やＩＴの発達した現代では考えられない様な「旅」ではあった。

むかし、むかしの旅の話

田村　陽子

　これは、今から４０年も昔の、私の旅の話である。
社会人になって、２度目の海外旅行を計画していた。１度目の旅は、ローマまで飛んで、そこから３週間、コーチに乗っての名所、旧跡巡りであった。イタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、フランス各国を巡った。短い期間に多くのものを見過ぎたので消化不良ぎみの旅であった。
だから、２度目の旅は前とちがったこと、家庭滞在して、その国の生活ぶりを観察し、語学研修することであった。

　日本全国から集まった、色々な職業についた社会人や学生が５０人位集まった。ガイド無しなので、旅行前に何度か東京に集合して研修会を持った。そして、日本文化の紹介をするプロジェクトを組んだ。全員ゆかたを持ってくること、お茶やお花、習字、空手のデモンストレーションも決めた。フルートの演奏も決まった。私は合唱をすることにした。

　行き先はアメリカ西部、ワシントン州である。７月か８月の夏であった。シアトル空港に着いた時、１つのラゲッジが届いていない事がわかった。私たちはその人のために、何ドルかずつ出しあってサポートした。(後日その荷物は無事に滞在先に届けられたのだが。)もうすでに、助け合い精神が芽ばえて、自然に行動出来たことはうれしいことだった。シアトルからコーチに乗って５時間位で目的地の Yakima という所についた。真っ赤な大きいリンゴの産地で、青森県と姉妹関係があると聞いた。

　Yakima に着くとホスト・ファミリーが待っていた。私のホストは教員を退職したばかりの女性、ロザリンとその姉さん（未亡人）ジュリアだった。地下のある、大きな２階建ての家だった。姉さんは「よく来たネ」と言って、友人をさそって、車で何時間も走って、Chinese restaurant に連れていってくれた。ゴルフ好きな姉さんは、私にも play させてくれた。それが始めで最後のゴルフだった。ロザリンは仲良しの友人をさそって、私をレーニア山（標高４３９２メートル）のふもとまでドライブしてくれた。６０才を過ぎた女性が車を自由に乗りまわして、アメリカ女性ってすごいナーと思った。

月曜日から金曜日まで、近くの Community　College へ英語の勉強に通った。何を学んだか、何一つ思い出さない。きっと聞く力が足りなくて、何も理解できなかったのかもしれない。

第一日目のロザリン家の朝食にコーンフレークにミルクをかけたのが出た。そして食前の祈りが始まった。その頃私はクリスチャンの事をよく知らなかったので、「何でコーンフレークスのために祈っているのだろう?」とおかしかった。家庭内に電化製品がいくつもあった。
洗面所に行くと、電気歯ぶらしがあってビックリ！　キッチンでは、スィンク（流し）の中にディスポーザーがとりつけてあって、野菜の皮など、細かく刻まれて下水に流れていくのを見て、又ビックリ！
肉の大きなかたまりが料理されると、それを切るのに電気ナイフ！又又ビックリ!キッチンには天井まで届く程背の高い冷蔵庫が２つもそなえられていた。たったの２人家族なのに。
私に大きなベッドルームが与えられ、暑い夏だったので、天井にとりつけられた大きなプロペラがクルクルまわっていた。

ある日、ジュリアが庭の芝生をきれいに刈った。そしてロザリンの友人達が着かざって、カードをするために集まってきた。私はゆかたを着て、鶴を折り紙で折って、お盆に載せ、１つずつ配る役目をおおせつかった。女性の何とぜいたくな時間の過ごしかた！　おしゃれの仕方も日本女性と何とちがうのだろうと感心した。

教会にも連れて行ってくれた。賛美歌をうたっていると、どういうわけか、涙が溢れてきてしょうがなかった。あれは何の涙だったのだろう。

又映画に連れてってくれた。「トムソーヤの冒険」だった。映画よりもその建物のすごさに驚いた。オペラハウスのようにバルコニーがあり、カーペットが敷いてあり、すごいどっしりしたカーテンがかかっていた。日本では見たこともないようなお城のような建物だった。

又、第二次大戦の時、アメリカの捕虜になった日本人部落を訪問した。彼らは非常に喜んで、私達の日本文化の夕べを懐かしんでくれた。彼らも私達のためにおいしい日本食を用意してくれた。

それからアメリカ･インディアン部落を訪問した。丁度何かのお祝いごとがあったようで、広いテントの中に沢山ごちそうが並べてあった。床にベタッとすわって、食事したが、どういうわけか、その時の写真は一枚もない。

約束の３週間の最後の日､Collegeで日本文化の紹介を行った。生け花、習字、空手、フルート演奏、荒城の月の合唱、ゆかたを着て盆踊り。ホスト・ファミリーは喜んでくれた。このことは、ローカルの新聞に、大きく取り上げられた。

次の日、ホスト・ファミリーとの別れ。泣けて泣けて仕方がなかった。

日本に帰ってからも文通が続き､私がロンドンに住むようになってロザリンは１度我が家に遊びに来てくれた・・・・。

昔、昔の懐かしい旅の思い出である。

英国春秋俳壇

「俳句を学ぶ会」作品集

春愁と隣りあわせの夕餉かな　悦子キング

夏空に沿道うずむ祝い人　日出美バンダースケイフ

それぞれに香り誇れる薔薇の園　田口邦子

待ち人のたたずむ木影初夏の昼　福留美穂子

わが胸に吹き寄せ来る秋の風　幸子ハートレイ

部屋に満つ香漂えり衣更　富美子マースィー

早起きの身もひきしまる氷雨かな　葉子デニヤ

盛り過ぐ花さみしげに秋立てり　上田陽子

秋夕立雨具も無しの帰り道　藤原さかえ

秋の日に文字おぼろにて拡大鏡　康子ロケット

初午やすがらるる身の持ち重り　矩子クーパー

下田歌子

湯浅茂雄

近代女子教育の先駆者であり、実践女子学園（明治 32 年創立）の創立者である下田歌子はイギリスに深い関わりを持つ人物である。(写真は明治 35 年頃の歌子)

下田歌子は、明治天皇の二人の皇女の教育掛を拝命するにあたり、天皇家から欧米女子教育視察を命ぜられ、明治 26 年 9 月から明治 28 年 8 月までの 2 年間、単身で渡欧し、ロンドンを拠点に視察活動を行なった。この間、明治 28 年 5 月に日本人女性として初めてヴィクトリア女王に拝謁を許されたことは特筆に値する。欧米各地を視察したが、特にイギリスからは多くを学び、一般女性を対象とする女子教育の確信に至り、帰国後の明治 32 年、女性の地位向上の拠点として実践女子学園の創立に至る。その後もいくつかの女子教育期間の設立に関わって行くが、その大きな契機はイギリスでの女子教育視察にあった。

下田歌子は安政元年に、現在の岐阜県恵那市岩村で、岩村藩の藩校(知新館)の教授職にあった平尾錬蔵の長女として生まれる。幼名を平尾鉐といい、聡明な少女であり、5 歳で俳句、和歌を詠み、8 歳で漢籍を解した。明治 4 年、16 才の時に、東京に職を得た父を追って上京する。翌明治 5 年、宮中に出仕し、後の昭憲皇太后に仕えたが、「歌子」の名は、この時、鉐の歌才を愛でられた皇后から下賜された名である。明治 12 年、下田猛夫（明治 17 年病没）との結婚のために宮中を辞すが、明治 15 年、周囲の求めに応じ、九段南の自宅に上流子女を対象とした「桃夭学校」を開設する。さらに明治十八年、皇后の意志により近代的な女性教育機関として華族女学校が開設されると同時に、下田は幹事兼教授に任じられ、翌年、実質的な校長職である学監兼教授に任じられる。桃夭学校の生徒の多くも華族女学校に移った。その後、明治天皇の二人の皇女の教育掛への内定があり、直接にはその研鑽のための渡欧であった。

そのイギリスでの足跡の一部を紹介する。下田は、明治 26 年 10 月初旬頃にマルセイユ港に到着後、11 月までパリに滞在し、12 月にロンドン入り、ここで新年を迎え、間もなくブライトンに移って英語学校に通い、4 月のイースター後、ロンドンに拠点を定めたと見られる。

ブライトンは下田歌子がイギリスで初めて長く滞在した街で、英語力を集中的に身につける為の滞在であった。英語を学んだ場所は、下田が帰国後著した『泰西婦女風俗』(明治 32 刊）中、ブライトンの海水浴の様子を述べる項に「寓居せしはブライトン海浜の某家塾」とあるのみであり特定できないが、英語習得に一定の成果を挙げたことは、後述するドロシア・ビール校長宛の下田自筆の英文書簡からうかがうことができる。

下田は明治 27 年 4 月、滞在先をロンドンに移し、以後の女子教育視察の拠点とする。ブライトンから居を移した直後の住所は不明であるが、居を定めて間もなく、下田は上流階級の夫人であり親日家･比較宗教学者であったエリザベス･アンナ･ゴルドン(Elizabeth Anna Gordon 1851-1915)と出会い、並々ならぬ親交を結ぶことになる。やがてゴルドン夫人の申し出により、ゴルドン邸に寄寓することとなる。ゴルドン夫人の下田への助力は絶大なものがあった。ヴィクトリア女王に拝謁を許されたのもゴルドン夫人の斡旋による。ゴルドン邸滞在のおかげで、下田はイギリスの家庭や夫人の子供が通う学校の様子を目の当たりにすることが出来、内側から細かく観察できたのである。以下は、当時貴族院議員であった谷干城に宛てた書簡（明治 27・7・10 付）で、下田が女子教育に言及した部分である。

女子教育の如きは 是非とも欧列国の其の基礎より細かに観察し 而て換骨奪胎して始めて能くわが国に実行可致に 其の慣習を知らずして教育せば 寧ろ教育無きにしかずことに女子教育に於いては 先其家庭の容子を女子の目を以て充分に賢察致不候ては百般の教育法の何によりて起こるかはわかり申まじく候その趣旨は、欧米の教育はそのまま日本

に移植しても意味はなく、細かに観察し、その本質を見極めた上で日本の実情に合わせて導入すべきこと、特に女子教育においては女性の目で、欧米の家庭の様子を十分に観察しなくては分かるはずはないと述べている。ゴルドン夫人の助力による環境を最大限に活かしながら、時の政府に少なからぬ影響力を持った要人に対して、下田らしい強い自負の念を表明している。

また、これに先立つ佐々木高行宛書簡（明治 27・5・31 付）における内容は重要である。

今如此欧米列国 東洋の隙を伺いつつある時に於いて みすみす漁夫の利となすべき（中略）かえすがえすも如斯硝煙砲声の間に兄弟の国たる日清相見る事に立至候事残念千万に候（中略）何卒此後わが政府の充分強固に 百年の善後策を論ぜられ候事をのみ祈り入り候(中略）私は百年の長計をたて候

下田の在欧中、日清戦争が勃発する。書簡は開戦前夜の時期と思われるが、下田は日清を「兄弟の国」と表現し、このような事態に至ったことを嘆き、欧米列国に隙を突かれかねないとも述べている。ついては日本はよくよく将来のことを考えなくてはならいとし、自分は「百年の長計をたて」たとする。これが女子教育による女性の社会的地位向上の拠点としての実践女子学園（実践女学校・実践女子工芸学校）の創立の計画であった。明治中期しかも女性の単身での海外生活の困難は想像に難くないが、そんな中でも故国とその将来を一途に憂える下田の姿がある。

実践女子学園史はイギリスの下田の住所を 61 Princes Gate と記録するが、ゴルドン邸の住所に他ならない。地下鉄の South Kensington 駅近く、Victoria and Albert Museum に近接するところで、現在は大きなビル(マンション)が建っている場所（ビルは 59～61 番地までを占めている）である。その後、理由は分からないが、下田はゴルドン邸の近くに居を移している。チェルトナムのレディース・カレッジには、ドロシア・ビール校長に宛てた下田の英文書簡(明治 28 年 5 月)が 5 通残されているが、そこに発信元として下田のロンドンでの住所が記されている。19 Pelham Place, South Kensington である(写真)。地図があれば現在も容易に辿り着ける場所である。ここから、下田はイギリス国内の多くの女子教育機関を可能な限り訪ね、校長に会い、話しを聞き、学則などの資料の提供を受け、あるべき女子教育機関の姿を模索していった。チェルトナム、レディース・カレッジのドロシア・ビール校長には多大の便宜を図ってもらったようで、下田は前掲書において、その人柄と並々ならぬ厚情に対して最大限の賛辞を贈っている。

この他、分かっているだけで、オックスファードの Somervill College、ケンブリッジの Newnham College、Girton College、The Cambridge Training College for Women（現在の Hughes Hall）などを訪ねている。この他にも下田の前掲書（『泰西婦女風俗』）には、湖水地方に関して「アンブルサイトの家庭教師学校(ガバーナススクール)」や「ウィンダーミアの女学校」と見え、後者に関しては「当校の塾生は、百二三十人にして、孰れも皆十六七歳より二十四五歳迄の人なり」とまで具体的な記述があり、下田がこれらの施設を訪ねたことは確実だが、私の滞英中においては、当時存在したはずの女子教育機関の特定に至らなかった。情報をいただければ幸いである。

下田歌子は帰国後の明治 31 年、「帝国婦人協会」を組織してその会長となり、「帝国婦人協会設立主意書」を起草する。この文章は女性の社会的地位向上を目指すことを高らかに宣言する名文であるが、このなかで「揺籃を揺がすの手は以て能く天下を動かすことを得べし」(「揺籃」はゆりかご。ゆりかごを揺する手は母の手であり、女性の手である。その手が天下、社会を動かすのだという意味）と述べている。実践女学校・実践女子工芸学校は帝国婦人協会のもとに明治 32 年に設置されたが、「揺籃」の言葉のような気概を持って学び、仕事をし、家庭を守ることのできる志の高い女性の育成を目指した。この教育理念は今も現代の実情に合わせて具体化されつつ受け継がれている。下田歌子がイギリスで確信した「百年の長計」は今なお続いている。

（筆者は 2013 年５月～2014 年３月の期間、ケンブリッジ大学<Faculty of Asian and Middle Eastern Studies>の客員研究員）

英国春秋俳壇

さくらんぼ

エリオットつや子

指先の黒くなるまで蕗をむく
ゆるやかに水を流して苺洗う

さくらんぼ紅いハートの形して
さくらんぼ秤にかけられ売られゆく
スイートピーからみ絡んで伸びていく

わが家にたどり着くなり夕立止み
夏波に合わせてしている深呼吸
尾をふりつ夏痩せの猫ひざに乗る
万緑の雨宿りなるガード下

子ぎつねの育ちざかりの白尾っぽ

デカン高原を行く
アジャンター石窟とエローラ石窟

小川　のり子

綿の花を摘む人々が点在する高原を、列車はゆったりとした速度で走り続けた。時々現れる鮮紅色の花をつけた火炎樹が、一瞬あたりを華やいだ物にはさせるが、あとは乾いた大地が延々と続き、私の知る爽やかな高原のイメージからほど遠い眺めである。それもそのはず、ここは志賀でも蓼科でもなく、インド大陸の中央部に位置する溶岩台地、デカン高原であった。
私にとってゴビの砂漠とかカラハリ砂漠、そしてこのデカン高原と云えば、何か非常に遠いとても訪れる事の出来ない世界という思いがあって、それゆえにロマンに満ち溢れた場所でもある。今、こうしてその別世界の一つに足を踏みいれ、風景はともかく、はるばるやって来たこと自体にすっかり酔いしれていた。

デリーを出発して６日目、レストラン、バー、サロン、ジムまで搭載したこの走るホテルはやっとカリスガーオン駅に到着。土地の人々の歓迎ダンスを受けた後、エローラ石窟に向けてバスで出発。道中、見るのも憚れるほど貧しげな家々と人々を通り抜けて到着した場所は、夕日に染まり眩しいばかりに輝く石窟群であった。限られた時間のため、まずは最大の規模を誇るカイラーサナータ寺院に直行。

この巨大な寺院は一つの岩山がくりぬかれて造られたもので、高さ３２ｍ、幅４５ｍ、なんと奥行が８５ｍもあるとのこと。「一体何処から手を付けたか？」と聞きたくなるが、山頂から祠堂、回廊、神像、ゾウと種々の動物達と彫り進められ、主神にシヴァを祀るヒンドゥー寺院である。壁面にはヒンドゥーの神々の、あの独特の肢体をくねらせたダイナミックでエロティシズムのある浮彫が施され、神々と動物の巨大な像がその空間を埋めていた。寺院の列柱から望まれる空は、茜色、水色、灰色の濃淡で彩られ、特異な建造物をよりドラマティックなものにさせるに十分。私はこの自然が描き出した得も言われぬ色合いに、寺院見物をしばし忘れて見とれていた。
先刻、ヒンドゥーの神々のエロティシズムと形容したが、この教えでは性的なエネルギーは神聖なものとみなされ、性愛欲求(カーマ)は、宗教的行為(ダルマ)、実利的行為(アルタ)と共に人生の３大目的とされているそうである。

この寺院について、私は長いあいだ思い違いをしていた。おそらくこのエローラという名からの連想だろうが、私はここがあの「A Passage to India」の舞台であろうと勝手に思い込んでいた。女主人公が或る石窟寺で、ヒンドゥーの男女神の肢体をくねらせた官能的な彫り物みて夢想に駆られるシーンがある。それで、実はここに来るのを楽しみにしていた。しかし、フォースターの原作は“架空の場所”であるそうで、ここがあの小説で、無実の男がもう少しでわいせつ罪に問われそうになった舞台ではないことは確かである。日の暮れぬ間にと、あれもこれもと盛りだくさんに見回ったので、残念ながら私には妄想に耽る暇など全くなかったが。

夜汽車と云えば何となくノスタルジックな響きがあるが、実際はあまり快適な物ではない。昼間、座って車窓より移りゆく景色を眺めているとついウトウトとしてしまうが、夜間、横になると列車の単調な振動にも相当な強弱があり、ガックンと揺れたり、出発・発着の際の振動は眠りを大いに妨げるものである。

翌朝、少々睡眠不足気味ながらも、この旅のもっとも訪れてみたかった場所、アジャンタ

一石窟の最寄駅、ジャルガーオンに無事到着。前日と同じく歓迎ダンス、貧しげな家々、人々を通り抜け、前日よりも長時間バスにゆられて、アジャンター村に到着。寄ってくる物売りを右に左にと避けながら、心中、どいて、どいてと叫ばんばかりに、傾斜のきつい道を上り、階段を駆け上がって、やっとワゴーラ川の渓谷に穿たれた石窟群に到着。思わず、「あった、あった、写真で見たものと同じものがあった」と叫んでしまう。
ここはデカン高原の北西部、３月とはいえ日差しは真夏のそのもの、吹き出る汗をぬぐいながら、一瞬何処から始めようかと迷ってしまう。青々と樹木の繁る渓谷を背景に谷に沿って半円を描きながら、目前に全長約６００ｍにわたって大小様々３０の石窟寺が並んでいる。紀元前２世紀ごろに最初の開窟があり、その後興亡を繰返しながら、紀元７世紀ごろを最後に、以来、１９世紀初頭にイギリス人によって再発見されるまでほとんど忘れられていたそうである。ここにはインド最古の仏教画が残されており、その繁栄の様子は三蔵法師の『大東西域記』にも言及されているそうである。壁画が残っているのは７世紀ごろのものといわれるが、非常に保存状態がよく、その彩色の鮮やかさには驚くばかり。出発前、アジャンターの壁画集をさんざんながめ、実物には期待するなと自身に言い聞かせて来たので、その感銘度はより大きなものであった。

私は仏教画と聞くとすぐ、曼荼羅図とか涅槃図などの動きのない図象化されたのを思い浮かべてしまう。しかしここに描かれた壁画群は絵巻風の物語画。
出家や輪廻転生を軸にしたエピソードばかりではなく、ギリシャ神話のように若い女性に姿を変え、漂流した船乗りを酒に酔わせたあと、牙をむいて襲う食人種。凶暴な象を使って仏陀殺害を企てる仏陀の親族のような、俗界のストーリーも描かれている。登場する人物達もふくよかな肉体をもつ仏陀やその弟子で、特に女たち、胸に鳩を抱く女、食べ物を捧げ持つ女、その多くが豊満な胸を露わにし、まさにルーベンスやルノワールの女たちと言いたくなるほどである。西洋絵画の特許のように言われる遠近法も、それが通説となる以前に描かれたはずのこの壁画には存在し、動物たち、ゾウ、猿、鹿、馬が実に生き生きと描かれている。洋の東西を問わず多くの寺院建立は権力者によってなされるが、このアジャンターやエローラのそれらは、仏に帰依した僧侶たちが数十年かけて、こつこつと造り上げていったものであるそうだ。もちろん雲をつくような尖塔もなく、巨大なドームもなく、光に反射して美しく輝くステンドグラスもないが、何物にも妨げられず静かに祈る場所としては、最高の場所ではないかと思われた。

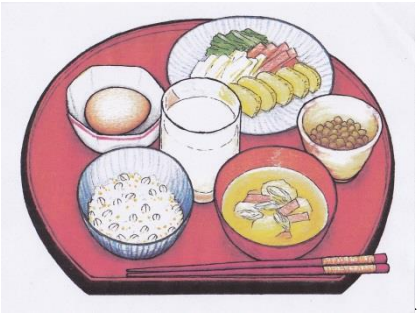
人間とはある意味では奇妙な動物である。より簡単な平地を選ばず、わざわざ人里離れた辺境で、岩石を削り、渓谷をくり抜いて祈りの場所を造る。現代に生きる我々から見れば、

岩石を砕くダイナマイトもなく、石を穿つ電気ドリルもなく、重い材料を運ぶ車もなく、まして暗い洞窟壁に彩色を施す際の灯りすら十分でないのに、「何を好んでそんな場所に」となぜなぜだらけである。それでもノミや槌をふるい、松明をたきながら、何十年、いや何百年もかけてでも一心に神像を彫り、柱を削り、仏陀の生涯を壁に描いてゆく。もうそれらすべての困難さを伴う行為が,“祈り”であり“無明からの解脱”そのものであったのかもしれない・・・と少々瞑想的な気持ちにさせられたのが今回の旅であった。

お祖母ちゃん家の朝御飯

ビドル　恵

午前５時、賢治叔父さん（正確には従兄）が牛舎へ行くのに、当時小学生だった私は頑張って早起きしてついて行く。



カット：めぐみ

牛舎の重い戸が開かれ寒気が中に入り込むと、牛たちが干し草の寝床からいっせいに立ち上がり、牛の吐く息と干し草から登る蒸気が靄のように白くかかるのが見える。

牛舎の中は干し草と糞の匂いに乳臭さが入り混じるが､冷んやりした空気のせいかさほど気にならず、私にはむしろ好ましいほうの匂いであった。

ここは私の祖父母の農場、北海道は日高山脈の麓、上川郡清水町字美蔓。TV ドラマ“北の国から”の舞台、富良野から東南に山越えすること約四十五キロ程、高原の酪農地である。

祖父，氷見治三郎が昭和の初期ここに入植開墾し、亜麻や馬鈴薯（じゃがいも）、清水町に製糖工場ができた後は砂糖大根(ビート)等も作ったが､寒冷地の為収穫が限られた。息子を大戦で亡くし、孫の代に移ってから折良く高度経済成長が始まり、それに伴って牛乳の需要が増えたので本格的に酪農と鶏卵にも着手していた。

家族は九人。祖父母、叔母三人、伯母に二男一女の従兄妹たちの三世代同居（全員大人で農作業に従事していた）。

そして乳牛四十頭、鶏六百羽に、土地を耕したり作物や牛乳を運ぶ為の輓馬（寒さに強く体の大きな橇引き馬）が三頭、豚が常時五～六匹と台所の残飯処理を兼ねた番犬一匹の大家族であった。

従って農場の規模も大きく、農耕具の収納と厩を兼ねた大きな納屋を始め、巨大なサイロと牛舎、囲いのついた豚小屋に犬小屋、少し離れて牛舎よりさらに大きな鶏舎とが、コの字に建ち並びその正面に母屋があった。

人間の住む母屋は他の建物に比べて小さくて質素､間取りが田の字の民家造りだが大家族用に総二階建てで、十二帖大の板敷きの台所（DK）に浴室、手洗い、作業場に薪小屋が付いていた。

屋根は本州のような藁葺きでは無く､北海道は積雪に耐えるためと雪が滑って落ち易いように軽量で急勾配のトタン板葺きである。

その上､高原で吹きっ晒しの厳寒に耐える為に建物の囲りには常緑針葉の防風林が植えられ、窓は全て二重～三重、台所と茶の間にはそれぞれ大きな薪ストーブが据えられていた。

私たち兄妹三人は、学校の夏冬の休みになると初めは母に連れられて、後に兄が小学校六年生になると子供たちだけで（母はラーメン屋の経営があったので）この祖父母の農場へ行きひと月を過ごした。

親の反対を押し切って、母は見栄えだけが良くて職の定まらない父と結婚したので、その後の貧困に苦しむ母のことを、祖父母は知ってはいても直接助けたりはしなかったが、「孫には罪は無い」と言って休み毎に私たち三人を預かってくれたのだ。

そうして母の負担を、いくらかでも軽くしてやりたかった祖母の心使いであったから（母は祖母の連れ子だった）子供心にもこれが伝わって、むっつりと厳しい祖父より祖母の方に親しんで、この休み毎のピルグリムを私達は“お祖母ちゃん家に行く”と呼んでいた。

足寄町の駅から初期は蒸気、後にはディーゼルの二両編成の列車に乗って、池北線（池田～北見間で現在は廃線）をトコトコと南下すること一時間半、池田町で石勝線（日高山脈を越えて石狩と十勝平野を結ぶ）に乗り換えて西へさらに二時間いくと清水町に着く。

駅から大通りのバス停留所まで歩き、そこから鹿追町行きのバスに乗って北上すること一時間。

バスはエゾマツやトドマツの濃淡する山並みを遠景に、白樺と熊笹の生い茂る山道をひたすら登り詰め、やがて視界がパァッと広がってなだらかで広大な緑（冬なら真っ白）のスロープに赤や青のかまぼこ屋根の牛舎とサイロが、ポツポツ点在するのが見えて来ると美蔓である。

幸いなことに“お祖母ちゃん家”の農場とバス通りの国道を結ぶ小道の入り口にバス停があったので、夏ならそこから道端に木苺やグーズベリーを摘みながら（口に入るほうが多かった）行く。

冬になってこの山道が凍ると重いバスは登り切れなくなり、車掌さんが「すんません、ちょっと降りて下さい。坂登り切ったら又乗って貰えますから」とひら謝りし、乗客はさして文句も言わず「やれやれ、又だべさー」と言う面持ちで、バスの後について凍った坂道をてくてく登って行くという、実にのんびりした時代であった。

そして大雪が積もれば、バスは最初の坂道の下、バス停に唯一の駄菓子屋さんの在った中美蔓までしか行かず（美蔓や鹿追は孤立した）子供たちの足でさらに一時間、腰まである（私の場合は脇の下）雪の山道を歩いた事もあった。

勿論この駄菓子屋さんが、子供たちだけで向かったことを祖父母の家に有線電話で知らせてくれたのだろう、祖父が輓馬に引かせた橇で国道まで迎えに出て来ていた。

子供だけの旅故に乗り継ぎや待ち合わせ時間等、あれこれと大人の手助けを受けながらであったろうが、兄は責任感強く常に私たちを励ましながら、概ね五～六時間の長旅を敢行してくれた。私たちも黙々と兄に従い頑張って歩きもしたが、如何せん姉は乗り物に酔い安く、見かねて親切な小母さんが、ハンカチやらティッシュやらをバッグから取り出して介抱してくれた時もあり、兄は顔で笑ってはいても胸の内はきっと心細く、かなりのプレッシャーではなかったろうかと今になって思う。

そこまでしても“お祖母ちゃん家”に行きたかったのは、自然と動物が好きという理由の他に、祖父母の家は明るくて皆んな優しく、その上美味しいご飯が腹一杯食べられたので、貧乏で父母の諍いの絶えない我が家より遥かに居心地が良かったからであった。

牛は白と黒の斑模様のホルスタイン種、これが二列お尻を向かい合わせに立ち朝食を待っている。

乳搾りは朝夕二回だが、食事をしないことには乳の出も悪くなるので、朝は餌やりが優先だ。

子供の私にはする事が無く、時折牛の鼻づらを撫でながら、叔父さんの作業を見ているだけなのだが、清んだ牛の目や生まれたての仔牛の可愛らしいこと、牛舎へ行くのが大好きであった。

賢治叔父さんは紺のつなぎの作業服に作業帽、両腕に黒の肘当てカバーと白い膝まであるゴム長靴といういで立ちで、餌やりの後はお尻の並んだ中央の溝の糞尿を、ブラシを使って洗い流し、大きなフォークで汚れた干し草も取り替える。

それから一晩眠ってパンパンに漲った牛たちのおっぱいを洗い清め、体調をチェックしながら搾乳器を手際良く取り付けていき、いよいよ搾乳の始まりだ。

その頃になると立っている足先が冷えてくるので、私は先に母屋へ帰る。

叔母さんたちについて鶏舎へ行った姉は、生みたての卵を朝食用の分だけ手籠に入れて持ち帰っており、祖母と伯母が朝食の仕たくに取りかかっている。

ガスコンロの上に大鍋で麦飯と味噌汁が炊かれ、薪ストーブの大型湯沸しからは湯煙が勢い良く立ち登り、外から入って来ると台所はむっとする程の蒸気に包まれていた。

私たちは、この湯沸しから洗面器にお湯を入れて貰い、大人の邪魔にならぬよう浴室の簀の子まで持って行って顔を洗う。

賢治叔父さんが牛舎から牛乳の入ったバケツをさげて戻ってくると、さっそくそれを薪ストーブの上の大鍋にあけ、沸騰し過ぎないように弱火でじっくりと煮沸殺菌する。

これは家族が朝食用に飲む分で、祖母に教わりながら時折木べらで静かに掻き回すのは私の仕事、農家は全員が力を合わせて働くのがあたり前で、子供でもできる事は手伝わされた。

お産をしたばかりの母牛の初乳（産後一週間はクリーム状で濃厚）がある時はバターも作った。初乳を一旦沸かしてから大きな空瓶に七～八分目ほど入れて蓋をし、両手でしっかり持って三十分ぐらい振ると脂肪分が分離してきて白いもやもやした物ができる。

さらに振り続けると次第に固まってくるのでこれをすくい取り、水分を押し出してから塩少々を加えて練り混ぜ、タッパに入れて保存する。（チャーハンや炒め物に用いる）

炊き上がった麦飯の最初の一杯を祖母が仏壇に供え、厩へ行った祖父や叔母たちが生きものの世話をし終えて戻り、全員揃ったら朝食の始まりだ。

麦飯と味噌汁の大鍋が膳の真ん中にでんと置かれ、皆でそれをぐるりと囲んで座るが、祖父だけはストーブの向こう側の別膳で、祖母が給仕に付いた。

祖父だけに何か特別に一品多く作るということは無かったが、祖父の朝食の口きりはコップ一杯の焼酎であった。

麦飯は正確には米六分に麦三、黍一の雑穀飯で、味噌汁は茹でた大豆と米麹をすり潰し、塩を加えて混ぜ、三ヶ月以上熟成させた自家製の味噌に煮干のだし、具は畑から抜いたばかりのじゃがいもやにんじん、青菜や葱などで味も香りも強く美味しい。

おかずは大鉢に山盛りの漬物と生卵に納豆と全て自家製である。

農作業で体力を使うので家族全員が食欲旺盛で、女衆は御飯茶わんだが、男衆は（兄も含めて）丼で生卵をぶっかけた飯を喰う。

麦飯の炭水化物と生卵のたんぱく質、脂肪はエネルギーとスタミナ源だから、朝の卵かけ御飯は理に適った食事である。そして納豆でもう一杯、味噌汁から引き上げたじゃがいもにマヨネーズをかけておかずにする者も居る。

朝食が一日の始まり、もっとも重要であったから皆真剣に食べた。そして食後に、たった今までストーブで煮沸していた搾りたての牛乳を、丼やお椀でガブ飲みする。

姉は三歳までこの家に預けられ、お祖母ちゃん子で育ったので、この朝食はソウルフードである。麦飯に温かい牛乳をかけて食べるのが大好物だった。私の方はバターライス。タッパのバターをひと匙すくって、熱々の麦飯にのせて貰い、醤油をひと垂らしして掻き混ぜる簡単バターライスだが、新鮮なバターは香り良く、飯粒も艶々となって美味しく，後は漬物さえあれば幸せだった。

そして勿論、食事の終いにお椀に一杯の牛乳を飲む。

おかげで私は今でも牛乳を飲むのが日課で欠かす事が無いが、市販されている牛乳は、脂肪を高圧で均一に微細化して分離するのを防ぐホモゲナイズ加工と、超高温のパスチャライズ殺菌の為に味も濃厚さも格段下がり、祖父母の家で飲んだ搾りたての新鮮な牛乳には絶対叶わ無い。

朝食が済んでひと段落、その日の仕事の打ち合わせ等し、腹が落ちついたら後片づけの者、畑に出る者と分かれ三々五々母屋から散って行く。

私たち兄妹は残飯（麦飯に味噌汁の鍋に残った煮干と僅かの汁をかけたもの）の入った器を持って、豚小屋の向こうに居る番犬チャボに会いに行く。

この犬は長い茶色の毛を持つ中型の雑種で、うっかりしているとその存在を忘れてしまう程におとなしく、私たちが行くと嬉しくて体全体を振って甘えるいい子だった。

これで本当に番犬になるのかしらと思わせたが、鶏舎にキツネが寄って来ようものなら大声で咆えて知らせた。

チャボは外飼いで、たいしてかまっても貰えず、台所の残りの味噌汁ぶっかけ飯だけで北海道の厳寒に耐え、病気もせずに十八歳までの長生きをしたそうだ。

祖父母の家は家族全員が働き者で、良く食べ、良く笑い、実に気持ち良い程だった。
こんな家で育った母だから、怠け者で気分屋の父のことが腹立しかったのだろう、父が家に居る時は常に緊張し、諍いと涙の絶えることが無い訳が、子供心にも解るような気がしたものだ。
午後になって叔母たちや従姉の畑仕事が終わり、夕食の仕たく迄に僅かでも時間が有る時は、私たちの宿題を見てくれ、絵を描いたり、きれいな歌を合唱したりして相手をしてくれもした。
この合唱は、叔母たちの趣味としてかなり本格的になり、結婚して別々の暮しになった後も続いて、一緒に清水町のコーラスグループに入って全国コンクールにも出場したし、私が東京に住んでいた頃には、毎年の暮れに新宿厚生年金ホールで、ベートーベンの第九を唄うために上京して来る叔母たちの応援に駆けつけたものだった。（おかげで私も歌が好きである。）
こうして私たちは“お祖母ちゃん家”で思いっきり伸び伸びと自然を満喫して暮し、搾りたての牛乳や新鮮なバター、自家製で栄養の高い美味しい御飯を一日三食（朝食が一番印象に残っている）と、女学校を出た叔母たちの拵えたドーナッツとかを、しっかり食べて一月を過ごしたから、顔色もすっかり良くなり三人とも少々太りさえした。

やがて休みの終わりが近づき、私たちは新しい発見、例えば生みたての卵の暖かいことや、牛の鼻先のヌルヌルしていること、馬の唇は毛がビロードの様に柔らかくてよく動くこと、刺々で緑のグーズベリーはすごく酸っぱいけれど、熟れて赤くなると単に甘いだけでたいして美味しくない等々、沢山の思い出を持って、又次の休みに来ることを楽しみにしながら、母の待つ足寄町の我が家へ帰って行くのであった。

私のどうぶつ物語

矢　嶋　蓉　子

1970 年シャム猫を譲り受け、雌 1 匹では可哀想と雄を入手。1971 年仔猫 5 匹を産みました。娘達のコートのポケットに入る愛しさでした。トイレの躾を終え其々を友人に、との別れでした。

1973 年外地勤務タイ国（バンコク）が決まり、親猫 2 匹もハウス（立派な小屋）、湯タンポ、食料品（缶詰）付きで友人に引き取られて行きました。
バンコクでは室内専用犬に白のチワワを教え子宅の日本への帰国に際し貰い受けました。
子供達の情操教育の為にと、屋外用にはタイ犬を飼いました。タイ犬は２人のお手伝いさん達の友達で外を駆け廻り元気な犬でした。
ある日私の外出中に、門を開け放した折に道路に飛び出し、車に轢かれて即死との事。
私が帰宅した折にはお手伝いさんがその旨を報告、その頃には手、足は硬直していたのでした。早速庭に１メートル４方の穴を掘らせて日本式に埋葬。花を添え線香まで上げたので運転手もお手伝いさんもびっくりしていました。

何日か過ぎ又そっくりのタイ犬を飼い可愛がったものです。3 年半の任期が終わり、後任の家族にお手伝いさん 2 名共々引き渡しました。
私達の日本へ帰国時、門を出る時には涙を流して走り追って来ました。
帰国した日本では友人が最近の猫の流行では鳴き声も小さく、ペルシャが人気と紹介されました。そのお宅では数 10 匹飼われていました。2 部屋を改築アパートのようにエアコンも取り付け立派な事でした。その中から好きな猫を選んでとのこと、お腹の大きいペルシャを頂いて来ました。直ぐ 2 匹の仔猫を産み落しました、一晩中小指ほどの哺乳瓶で何回もミルクを与えました。これには長女も手伝って頑張りました。

此のペルシャ猫の名前はヴィヴィアン(アメリカの女優ヴィヴィアン・リー）その末尾リーを取り除きました。本当に美人でした。綺麗なカメオ色、長毛、両親代々、血統証付の最高の猫でした。俳優池部良の夫人がシャム猫協会会長でもありました。
私達は旅行の時も宿に泊まる場合も連れて行きました。(トイレ持参)
日頃散歩時には、私の肩に留まり襟巻きの様に抱えて近所を一周したものです。
主人云く「誰かが可愛い猫ちゃんねーと褒めてくれる迄帰らないの？」と笑いながら言ったものです。
そんな日々長女の息子（孫）誕生に香港に１か月の留守を次女に面倒を看て貰いました。何時もは家のグランドピアノの上には登らないのですが、娘が仕事から帰る頃にはその上に乗って澄まして待っているのだそうです。夜には玄関の私のスリッパを枕に私の帰りを待って寝ていたとの事です。
又長女の娘（孫）の誕生に、今度は次女も結婚して近くに住んで居ましたので又ヴィヴィアンを預けました。帰国しても次女はもう返さないと離しません。子供もなく動物好きな娘にとうとう渡してしまいました。
14 歳の長命でした。娘の知らせで病院に駆けつけた時には私を待っていたように、ママちゃんだよの言葉にウウンと、そして天国に旅立ちました。
多摩霊園に納骨。丁度設立された動物との合同霊園に一緒に入れるのをと勧められたのですが主人は俺は嫌だと、取りやめましたが。
其れから当地英国に滞在、娘宅には黒と白、手足が手袋をつけたように白い猫を飼っていました。名前はミトン、老衰で１７年の命でした。自宅の庭に婿、孫が穴を掘って埋葬しました。
さて主人の誕生日のプレゼントとして猫を飼いましょうとゆう事になり、本当は私が欲しかったのでした。本を取り寄せ、長女共々必死で選びました。長毛種は手入れが大変だからと、中毛種にと種類はラグドール（日本語ではぬいぐるみ）色は茶コールグレイ．耳、尾、手、足、顔正面、は焦げ茶、眼はブルー。ケントのブリーダー宅に 2 回ほど足を運び選んで来ました。
1 月末誕生、３か月は渡せないとのこと，漸く 5 月我が家に引き取りました。名前は５月（メイ）チヤンです。すくすくと元気に育ち、今では４キログラム、少々小柄な猫チヤンです。何不自由なく皆に可愛いがられ、特に娘の出勤時には玄関まで送りにでます、帰宅時にはどんな時でもすぐ解り飛んで迎えに行きます。

抱っ子は余り好きでは無く、これはヴィヴィアンとは生まれた時から飼育されたとの違いでしたからでしょう。
言葉は何でもすぐ解る様です。1 日 1 度のおやつ(ステック棒)1 本が嬉しくて、おやつ欲しい？と言いますと其のあり場所に誘導します。今も私の側で丸くなって眠っています。このメイちゃんは外には出しません、庭に抱っこして連れ出すのみです。
家の中を上、下階を自由に走り十分に運動は出来ているようです。
主人没後、私の心の友として側に居てくれる日々です、ありがとう。

1066 年・ ウイリアム征服王の故郷を訪ねて

岡村光雄

ノルマンディのカーンは 70 年前の 1944 年 6 月 6 日、第二次世界大戦のターニングポイントとなったノルマンディ上陸作戦(D day)が行われた海岸の近くの街です。さらに約 1000 年遡った中世ヨーロッパ時代、ノルマンディ公国のウイリアム王の軍勢が海を隔てたイングランド南部に上陸し、イングランド王ハロルド二世の軍を撃破した「１０６６年 10 月 14 日のヘースティングスの闘い、ノルマンコンクェスト」と言われる英国の歴史を大きく変えた場所でもあります。
私は「イングランド王ウイリアム 1 世兼ノルマンディ公ウイリアムとしてウエストミンスターアベイで戴冠し、ノルマン朝を築いたウイリアム征服王」について詳しく知りたいと思い、この春ウイリアムが生誕し、終焉を迎えたノルマンディ地方のカーンとファレース、バイユー、モン・サン・ミッシェル、ナント、英国のヘースティングス・バトル等を訪ね、かれの生涯を辿りました。

ノルマンディ公国とは、
◎ 当時のヨーロッパ大陸の状況とノルマンディ公国の誕生
ヨーロッパを席巻したゲルマン民族の一派、フランク王国は 870 年になると東フランク王国 (後のドイツ)西フランク(後のフランス)イタリアの三つに分かれますが、西フランク王国のカペー王朝は現在のパリ周辺のイル・ド・フランスと呼ばれる地方しか勢力の及ばない軍事力の弱い王朝でした。
それに先立つ 800 年頃にはスカンジナビア地方に住む北方ゲルマン民族も移動を開始。デンマークのデーン人は北海を渡り英国に侵入、ノルウェイのノルマン人はフランス北部に侵入します。ノルウェイ王の重臣であつたロロは国の掟を破った事で国外追放になり、ロロは無法者たちを集め大船団を組みフランス西北部のノルマンディ地方に上陸し略奪を重ねながら、セーヌ川を遡上しパリを圧迫します。フランス王のシャルル 3 世はロロに対して、「キリスト教に改宗し、王に臣下の礼を尽くす条件でノルマンディ地方の土地とノルマンディ侯爵の称号を与えフランス貴族に叙する。」との和議を提示します。
911 年ロロはこれを受け入れ、ルーアンを首都とし、ここの大聖堂でキリスト教へ改宗、ノルマンディの領地を臣下分けに与え、ロロへの忠誠を誓わせます。破壊した教会の再建、町を復興し商業を盛んにし、農業を振興させます。
940 年に亡くなったロロの子孫も優秀で三代目リチャードは息女をイングランド王国のエセルレッド王に嫁がせ、国の強化を図ります。そして 1027 年にはロベール 1 世が第六代のノルマンディ侯として即位します。
◎ウイリアム(後のノルマンディ侯ウイリアム)誕生
　ウイリアムは 1027 年ロベール 1 世が王子時代に、なめし皮屋の娘アーレットとの間にカーン近郊のファレース城で庶子として生まれました。
1035 年ロベール 1 世は一人息子のウイリアムを残し聖地エルサレムへの巡礼の旅の帰途小アジアの古都ニケーアで病没します。ロベールは出発に際し、ノルマンディ領土内の諸侯や騎士にたいして、ウイリアムを跡継ぎとして忠誠を誓わせ、後見人も指名していましたので、弱冠８歳のウイリアムはフランス王アンリ 1 世に臣従を誓い、第 7 代のノルマンディ公に叙されます。
しかし、血統を重視する貴族たちの暗躍で後見人達の多くが暗殺され、又幾度となくウイリアムにも危機が訪れます。その度ごとに忠臣・異父兄弟等の助け等により逃れ、この経験からウイリアムの危機察知能力や決断力が次第に磨かれていきます。

19 歳の時従兄の反乱に対しては、臣下の礼を取ったフランス王アンリ一世と共にこれを打ち破り、22 歳には隣国フランダースのボールドウィン伯の令嬢マチルダとの結婚にこぎ付け辺境を固めることに成功します。
この二人の結婚は近親結婚に当る為、ローマ教皇庁から当初は教会法違反として認められませんでしたが、実力者ル・ペック僧院長の知己を得、ローマ教皇の承認を得ることに成功します。これ以降ウイリアムのローマ教皇庁との太いパイプが出来ます。
1054 年になるとウイリアムの強大化を恐れたフランス王アンリ一世はノルマンディ南部のアンジュ―のマーテル伯と手を組みノルマンディに侵攻しますが、軍事力を強化していたウイリアム軍はこれを撃退、1057 年再度の侵入に対してはデイブ河の合戦で勝利した後一気にフランス領内に攻め入ります。アンリ一世は 1060 年屈辱的な和睦を結び、失意のうちに没します。
これを見た近隣諸侯も次々とウイリアム公に忠誠を誓い、ノルマンディ公国は当時のフランス諸侯の中で最強の公国と称されるようになります。その時ウイリアムは 33 歳でした。

イングランド王国と最後の国王エドワード懺悔王
一方イングランドに於いては、アングロサクソン族による イングランド王国はアルフレッド大王の時代に国が安定し栄華を誇りますが、その後の後継者は力不足でデーン人の再度の侵攻を防ぎきれずエセルレッド王が病死した後、デーン人カヌートが 1016 年イングランド王座を奪います。ノルマンディ公国からエセルレッドに嫁いでいたエマは、12 歳の息子エドワードをノルマンンディの修道院に送ります。しかしカヌート王の後継者たちは短命で 1042 年には王朝が崩壊してしまいます。

イングランド王として、ノルマンディで成長して既に４０歳になっていたエドワード王子が迎えられました。30 年間近くも修道士として過ごしてきた為、フランスの慣習がすっかり身に着きフランス語を話し、エドワード懺悔王と呼ばれる程敬虔なキリスト者であり、実際の政務は宰相のエセツクス領主のゴドウィン伯と次男のハロルドが執行していました。
又ゴドウィン伯は娘のエディスをエドワードと結婚させ、その結果ゴドウィン伯の親族の多く
がイングランドの地方領主になりゴドウィン伯の支配が強まり、エドワード懺悔王は軍の実権も失くしてしまいます。
1045 年になるとエドワードの関心事はテームズ川のサーリー島に王宮を建築し(現在の国会議事堂)、ノルマン様式の聖ペトロに奉献する為の聖ペトロ大聖堂(ウエストミンスターアビイ)を完成させる事でした。

しかし 1065 年 12 月 25 日完成したウエストミンスターアベイの奉献式に参列したエドワードの健康が急速に悪化、翌 1066 年 1 月 5 日は世継ぎを残さず死去します。
その時、臨終に立ち会ったゴドウィン一族が「エドワード王はハロルド伯を後継者として遺言した」と王位継承を主張し、ハロルド伯は翌日このウエストミンスターアベイでイングランド王ハロルド 2 世として、戴冠します。

ウイリアムのイングランド王座の主張とヘースティングの闘い
ウイリアムに戴冠の情報が伝わると、「王家の血筋はエドワードの又従兄のウイリアムに繋がるが、ハロルドには王家の血筋がない。」又「ハロルドは 1064 年にウイリアムのいるノルマンディを訪問した際、エドワード王亡き後にはウイリアムの王位を認め、ウイリアムの臣下となる。」との約束を破ったとハロルドに対して憤ります。

ノルマンディのカーンから西に 20km 離れた古都バイユーの

博物館には「バイユータピストリー」と呼ばれる縦 50cm 横 70m の巻物が展示されています。これはハロルドのノルマンディ訪問からヘースティングスの戦い、ハロルドの死までを細かく描写した歴史絵巻物です。
これを見ると確かにハロルド伯の乗った船が海峡を渡る時、目的地から離れた場所で座礁し、海賊に捕まり、救援に向かうウイリアムの姿と、ウイリアムに歓待されたハロルドが教会の聖遺物の上に手を翳し、「エドワード亡きあとは、ウイリアムの王位を認め、臣下になるという誓約の場面」が描かれています。
ウイリアムはイングランド侵攻を決意しますが、次のように慎重にイングランド攻略を準備します。

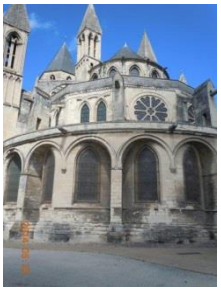
1. 法皇アレキサンダー2 世に対して「ハロルドは神の前で誓った事を破り、法皇が認めていない大司教によるハロルドの戴冠が執り行われた」等を訴え、法皇の錦の御旗を戴く。これにより軍の戦意を高め、インクランド侵攻の大義を天下に知らしめる。
2. 槍騎兵軍団と長弓隊で闘う為、軍馬を輸送する為の大型輸送船を建造する。
3. 沿岸警備の手薄な上陸地点を選ぶ(守りの堅固なドーバーの港は避ける) 等

1066 年の春より準備を重ね、風向きが好転した 9 月 27 日の夜、船 4000 隻、軍勢 8000 人の大船団でノルマンディ北部のソンム川河口のサン・ヴァレリ港を出港、9 月 28 日イングランド南部ピーベンシー港に到着。ヘースティングスに移動し此処に宿営。10 月 14 日ヘースティングスの北 30km のバトルの平原でハロルド 2 世のイングランド軍と激突、ハロルド 2 世の軍を壊滅させます。

８月、バトル駅で下車、歩いて約 30 分のバトルの町を訪れました。バトルの戦場跡には、ウイリアムが建設した戦死者を慰霊する為のバトル僧院跡と、ハロルドが戦死されたとされる場所に石碑が建てられていました。又バトル記念館では「20 分程のヘースティングスの闘いの映画」が上映され、戦場で使われた両軍の武器等も展示されています。付近に広がるバトルの戦場では「オーディオガイドによりこの戦場での戦闘の様子を体験できるウォーキングツアー」もあり、当時の戦いの様子を偲ぶ事が出来ました。

ノルマンディ公ウイリアムのその後

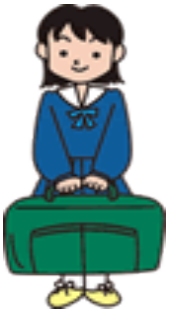
ヘースティングスの戦いに勝利した、ウイリアムはドーバー、カンタベリーなどを陥落させて、1066 年 12 月 25 日ウエストミンスターアベイに於いて「イングランド王ウイリアム 1 世兼ノルマンディ候として戴冠」これよりノルマン王朝が始まり、現在のウインザー朝のエリザベス二世迄続く王室の起源となります。
ウイリアムはその後 2 年程でイングランド全域を制圧し、奪った土地の台帳(ドゥムズディ・ブック)を作り、臣下の騎士・聖職者等に分け与えその代償として、王に対して従順を誓わせる「中世封建制度」を確立します。
一方海峡の向こうのノルマンディ公国の統治には手を焼きます。統治を任せていた長男ロベールが、フランス王領の拡大を狙うフィリップ一世にそそのかされ、二度に渡り父親のウイリアムに反乱を企てます。ウイリアム王は 1087 年セーヌ川沿いのマントの町を攻撃中落馬しその傷がもとで亡くなります。遺体はカーン城の近くのサン・テティエンヌ教会に移され埋葬されます。
この教会はマチルダとの結婚を認められた際の贖罪として、ウイリアムが法皇に奉献した教会です。



カーンの南 30km のウイリアムの生まれたファレース城を訪ね、ウイリアムの築いたカーン城に登り、ウイリアムが眠るサン・テティエンヌ教会の日曜日にミサに参列し、ウイリアムの生涯を辿りながら、中世ヨーロッパ時代に思いを馳せました。

「旅」の記憶

津久井安子



よく人生を旅に譬える言葉を聞きます。
昨秋兄が急逝してから、自分に残された時間を考えると、書くのは「今でしょ！ーー昨年の流行語大賞だったとか」と他の人と違った私の体験の内、何から書くべきかを考えました。

話の種としては、「いわゆる臨死体験」「自宅の洪水流失と二度ほどの全焼」「今では考えられない山間地での重労働」「３ｍ 位近くの立木への落雷目撃」「本当の飢え」「奇跡的回復と言われた交通事故」「妹、母、父、夫の重症患者の付き添いとその死」「兄妹の病気や事故による突然死」「生家の土地建物の競売立ち合い」等、他の人が経験する事のあまり無い様な事を経てきました。しかし、興味本位でない事と言えば戦中派としての身近な戦争体験となります。

人生とは時間を縦糸に、出会った人々や出来事を横糸にして織り上げる布のような物ではないでしょうか。
私と同年輩の人は誰もが戦争の記憶やそれにまつわる話をいくつかは持っていると思いますが、今まで話し合った事が一度も有りません。上司や先輩の方々もキッカケが無い限り、誰も自分から言わなかったので、沢山の貴重な話が語られる事、記録される事なく消えてしまったと思います。
戦争体験の色を何色と呼ぶべきか解りませんが、今のうちに書き遺す事が必要ではないかと近頃考えるようになりました。他の方々の「旅」の話を知りたいと切望しています。

私の人生最初の思い出は、遥か遠くの夜空がボーと明るくなっていて、集まって来た近所の人々の言葉にならない低い声でのざわめきが、何とも言えないマガマガしさで、私はそれらを聞くでもなくぼーっと立ったまま薄赤い空を見ていました。たったそれだけですが、それが前橋、高崎空襲の日の事で、その空の下で家を焼かれ、逃げまどった末、１２００人を超える人々が直撃弾を受けたり、逃げ切れずに焼け死んだのだと、就職してから、上司や先輩の体験談を聞いて初めて知りました。

次の記憶は清水の湧き出る屋敷内の水汲み場で、蛇が水の上に身を伸ばしているのを、見ていました。
その少し前に私が縁側から落ちて、腕を骨折したので、家を取り仕切っていた祖母が、子守の人に「安子を家の外に出さないように」ときつく言って居たとか。父が一人っ子で、兄が４人、女の子を！との願いを諦めかけた末に私が生まれたので、祖母は私を溺愛し母にも一切の手出しを厳禁していました。
誰かが何か叫びながら私の身体を抱き上げ、家の中に走り込みました。
そして暫くして、私の一番好きだった人が、泪を浮かべた目で私をじっと見つめてから去っていきました。
祖母が彼女を首にしたのです。
戦中からの人も含め、更に戦後の食糧難と住宅不足から、沢山の人々が疎開中で、彼女も数軒あった店子の一人でした。名前も記憶になく、兄の生前に訊きたいと思いつつ、忘れていた事の一つです。
祖母は薙刀の指南もしていたので、赤城山に米兵が空から攻めて来たという想定で、国防

婦人会員への竹槍の訓練指導を頼まれた時に「竹槍で人が殺せるか。第一相手は鉄砲を持っている」と断った人でしたが、後日その人の妹さんが進駐軍の子供を妊娠したか、出産し、周りの嫌がらせや白眼視からその家に住めなくなった時には、「安子が世話になった。困った事が有ったら何時でも来なさい」と見送る以外に方法か無かったとか、祖母の死の直後母がその例を引いて「凌辱されたら自死を」と７歳の私の前に懐剣を置いての最初の母の教えでした。

また家から少し離れた発電所の脇を通る時に、母は、この発電所の工事の頃は、この道を通るのが怖くて嫌だった。徴用されて来たよその国の人が、だらりと垂れさがった腸を両手で抱え、「あいごー」と叫びながらトンネルから出て来て、そのままバッタリ倒れて動かなくなったのを何人も見たと言った。
私が「そんな話を誰からも聞かなかった。」と言うと、村の中心人物の名を挙げて、「その工事で上に立って仕事をした人だから皆黙っている、お前も誰にも言うな。」と答えた。

しかし其の母も他の村人と同じように、人種的偏見は強かった。

私が雪の日の下校途中に、鼻緒の切れた下駄をぶら下げて歩いていると、家から出て来て、私を呼び止め、家に招き入れ、私がコタツで温まる間にお茶やお菓子をすすめ、鼻緒をすげてくれた美しく優しい人がいた。
きれいな標準語で「又いらっしゃい」と言われたのが嬉しくて、帰宅後その事を母に話すと、「二度とあの家にはいくな！外人と一緒に暮らしているような女だ」と厳しく言われ、その後は登下時にその家の前を駆け足でかけぬけた。

今、戦中戦後の話を聞く事は無くなりました。

第２次世界大戦が終結して７０年。もう悲惨な戦争はこりごりだ、２度と起こすまいと誓ってから７０年、被災した多くの国々、人々が復興に向け懸命に努力してから７０年。瓦礫の後に家々が建ち、焼け落ちた橋が架け替えられ、爆破された公園の木々も７０年の樹齢を誇る大木に育ちました。そしてその前後に生まれた人々、我々も含め、直接戦争体験はほとんどないとしても、随分色々なことを見たり、聞いたり、本を読んだりで学びました。しかし、残念ながら多くの地でまた新しい戦いが始まり、世の中は平和にはなっていません。こんな話を聞きました。
ある中学校で、先生が「太平洋戦争では日本とアメリカが戦った・・・・」と話し始めた時、一人の生徒が、「へぇー、日本とアメリカが戦争したの？それでどっちが勝ったの？」と質問したとのことです。その先生は絶句されてしまったそうです。
戦争の体験・記憶はその人の育った場所や環境で違って来るでしょうが、少しでもきちんとした記録を残すことは、次の世代への義務かも知れないとこのエピソードを聞き、過ぎ去って行く７０余年の歳月を振りかえりながらしみじみを思う今日この頃です。　　英国春秋つれづれに

インドへの旅

オハロラン美和子

１９７４年の夏、後に私の２番目の夫となった彼と BUDDHA の足跡を訪ねるたびをした。彼とは婚約中ではあったがまだ一緒に住んでいたわけではない。最初の結婚が見合い結婚で相手をよく知らないままに結婚して不幸そのものだったので婚約中の彼とはすぐ結婚する気になれずのばしのばしにしていた。
彼がインドの旅に誘った時二人きりで旅をするのは彼をもっとよく知るチャンスだと思い恐る恐る承諾した。父が熱心な禅宗で早朝座禅を組んでいたので子供心にもお釈迦様に興味があった。

インド行の計画や手筈は彼が全部して彼いわく「インドの旅行中はインド人と同じ食事をし、インド人が利用するホテルを使い出来るだけインド人の生活を試みること」だった。私は何も考えずにすぐ承諾した。
最初にニューデリーのエアーポートに着いて空気が全く違うのを感じた。暑いだけではなく空気の匂いまで違う。ミニバスが街へ出るので運転手に料金を払い席に着いた。乗客は５～６人で皆同じように料金を払った。運転手はもう１０分位して出発すると言い出て行ったが２０分待っても２５分待っても戻って来ない。皆いらいらして不審に思っていると周りにたむろしているタクシーの運転手たちがバスが満員になるまで彼は戻って来ないよと言った。言われるままにタクシーに乗ることにしたのだが何人かの男性が私のリュクサックに手をかけた。持ってあげるという意味らしい。断ったにもかかわらずひとりはドライバーの隣に座った。行く先のホテルの住所をつげるとよく知っている様子。私たちはほっとして窓から見えるニューデリーの景色に見とれていた。だが３０分位して着いたところがホテルでなくてサリーを織っている家内工業みたいなところに連れて行かれた。色とりどりのサリーの素材から種類、山積みされたサリーの日用着や儀式用、そして着付けまで説明してくれた。私は本職がフアッションデザイナーで日本のデパートのオートクチュール部門で１０数年仕事をしていたので、この講義まがいの説明は興味深く聞いて勧められるままに紫の絹のサリーを買い着付けを習った。さてやっと目的のホテルに着いたのだがタクシーに料金を払うだんになるとリュクサックに手をかけようとした男性までお金をせびるのにはあきれてしまった。ホテルの入り口の前には乞食が数名座っていて私のジーンズの裾をひっぱって離さない。怖くなり彼が少々のお金を渡してやっと中に入ることができた。
ホテルといえどもやっと個室ではあったが本当にベーシック。ツインベッドとトイレはついていたけど冷房はない。インド人の生活を試みることの約束を思い出し我慢した。
しばらく休んでからニューデリーの街を散歩した。道端にしゃがんでヘヤーカットしてもらっている人あり、街路樹にはセキセイインコが鈴なりに止まっていてぎゃーぎゃー鳴いていた。男性はほとんど白いチュニックと白いズボンだが女性は色とりどりのサリー姿でじゃらじゃらとブレスレットやアンクレットをつけていてきれいだ。

さてインドで初めての夕食だがインド人ばかり行くレストランに行った。大きなバナナの葉っぱにチャパテイがのっかり金属製のいくつもの小さいポットにカレーのルーや野菜をカレーで煮たのやヨーグルトみたいなものがでてきた。それをバナナの葉っぱの上で混ぜて手で食べるのだが手を洗ってもいないので困った。

最初の日に買ったサリーは数日後に盗まれてしまった。盗んだ人
は私たちが泊まっているホテルのマネージャーだった。支配人が見つけてマネージャーを庭で竹の棒で折檻し私たちにあやまり無事にサリーを返してくれた。

次にはヒンズー教のメッカであるベナレスに２等車で行った。窓には鉄格子がはめられていて席は板のベンチみたいで山羊や鶏や他の動物も一緒でものすごく混んでいた。
列車の出発寸前に屋根に上る人や窓にぶらさがる人、開けたままのドアにしがみついてる人たちがいた。私はラッキーで座ることはできたが隣の人の手に目をやると指が数本ない。思わず顔を見ると鼻はあるけど穴だけ・・・、気の毒と思う前にぎょっとした。気持ちが悪いのを隠さなければと下ばかり見ていた。

ベナレスの聖なるガンジス河は水に体を沈めている数十人の人、野菜を洗っている人、歯を磨いている人、食器を洗っている人、等でいっぱいだが水はものすごく汚く見えた。
私たちはガンジス河の河上まで行って体を洗い洗濯を少々した。

数々の寺院はヒンズー教と仏教と両方あるのだが仏教の寺院のお釈迦様の顔は日本のとでは大分違うようだった。
ヒンズー教の寺院は入り口に男性のPENISと反対側に女性のGENITALの大きな石の彫刻がありお参りする人が花環を掛けたり花々を投げ入れたりして入って行く。さすがの私も肝をつぶした。壁の彫刻もメイクラブとかエクタシーダンス等とにかく性的なものが多くて私は恥ずかしくてちゃんと見ることが出来なかった。子供たちもお参りするわけだから教育の違いに驚いた。なんという宗教の違い、なんという文化の違いだろう！

私はだんだん体調をくずしつつあった。不潔なのと、匂いと、食べ物とすべてがいやで一日も早く帰りたいと思った。

ベナレスからガヤに行った。見渡す限り水田の緑の田舎道を長いこと歩いてやっと一軒の茶屋を見つけた。インドのチャイはミルクと紅茶の葉っぱと砂糖を混ぜたものをぐつぐつ煮る。こってりとした味がしておいしく疲れが取れる。茶屋でお茶を飲んでいると村の子供たちが１０人くらい集まってきて田舎なので私たちが珍しいのかいろいろな質問をしてきた。一人か二人はかたことでも英語を話し少年たちは興奮して我先にと話したがった。楽しいひとときを過ごし写真を撮った。
やがて通りかかった荷馬車の後ろに藁が積んであったがその隙間に乗せてもらって出発した。すると５００メートルと行かないうちに後ろから自転車に乗った二人の少年が私たちを追いかけてきた。そして私に野の花の花束を投げてくれた。驚きと嬉しさで感激！
私たちはいつまでも大きく手を振った。ありがとう！

ガヤのホテルの部屋はものすごく狭くて天井から各々のベッドに三角形の蚊帳がつってあり夜は下してベッドに蚊帳の裾をはめ込むようになっていた。私は蚊とか蜘蛛を防ぐためを思っていたら、どうしてどうして夜になり明かりを消すと、蜥蜴かいもりかやもりか知らないが背中が茶色で腹部が朱色の生き物が壁も天井も全く隙間がないほどにはりついている。それが落ちてきたりベッドに入らないようにの為の蚊帳らしい。私はトイレに行きたくても蚊帳から出るのが怖くて我慢に我慢した。朝になると一匹も見当たらない。どこかへ消えてしまっていた。

次はブダガヤ。お釈迦様が菩提樹の木下で７年間も座って悟りを開いたところ。ここを訪れるのをずっと楽しみにしていたので私はすっかり興奮していた。菩提樹は囲いがしてあったか森閑として人気がない。私たちは菩提樹をしみじみと心ゆくまで観賞し手を合わせ長いこと祈った。
この頃から私は腹痛と腹下し、吐き気がして体力がすっかり衰えて

しまった。近くにあった日本のお寺にかけこんで助けをもとめた。お寺では快く泊めてくださり清潔な部屋と清潔な水とおかゆまでつくってくださった。すっかり治るまで居なさいと言ってくださって私はほっとした。日本人のお坊さんたちはとても親切だし、清潔な部屋と食べ物で私は少しづつ元気になっていった。その上お寺で養育している６才になるインド人の少年がすっかり私になついて私の世話をしてくれた。彼は流調に日本語を話すことが出来た。
毎朝窓の下で私が起床するのを待っていた。とても可愛い顔立ちの少年で頭もすごく良い。何日かして私が外出できるようになると、纏いつく乞食やお金をせびって追ってくる人たちを適当にしかも二言三言で追い払い私を守ってくれた。彼は私を両親の家に連れて行った。若い夫婦の気持ち良い態度やもてなしを嬉しく思い楽しいひとときを過ごした。
寺院の近くで１２才か１３才くらいの少年がおじゅじゅや菩提樹の葉を押し花にしたようなものを売っていた。子供たちが働いているのは珍しくないが男の子ばかりだった。
婚約中の彼は私が治るまでのあいだ私の世話は少年にまかせて、自由に計画していたお釈迦様の足跡を訪ねたりリサーチしていた様子だった。
１０日あまりすると私は元気をとりもどした。次はお釈迦様が亡くなったクシナガーラに行く予定であった。乗り合いバスに何時間も乗った後、そこからはタクシーに乗った。行く先を何度も繰り返し告げたのだが勘違いかどうか妙なところに連れて行かれた。ネパールとの国境のちかくなのだ。日は暮れるしとにかく宿をさがし思案の末、数日後カトマンズーへプロペラの数人乗りの飛行機で飛び立ちこうしてネパールへのあらたな旅が始まった。

私のインドの旅は初めの１週間は不潔さと匂いと食べ物にうんざりして一人で逃げ出したいくらいいやだった。しかし１か月近くなると時間はあっても無いの如しで人々がそれぞれのカスト制度に合わせて頑張って生きている様子は、競争心にまみれた我々日本人との相違を思い知らされた気がした。
私が出会ったインドの人々は上流のカストの人たちではない。でも私はインドがこの旅で好きになったのは確かだ。
見渡す限り緑の水田のあぜ道を真っ赤なサリーをまとい頭にものを乗せて歩いていた女性の姿が一幅の絵のように今だに私の脳裏に焼き付いている。

英国春秋小辞典

その人の名は、仏様、お釈迦様、釈尊などと、日本ではさまざまに称せられています。仏（様）というのは、悟りを開いた人、覚者の意のサンスクリット語「ブッダ」に由来し、その漢訳「仏陀」の仏の字の訓読み。従ってこの名は、厳密には悟りを開いた後についてのみ用いられるべきなのでしょうが、一般には仏教の開祖の生涯を通じてそう呼ぶし、さらに物故して彼岸に行きブッダと同じ境涯に立った（成仏した）人々全体をさすことはよく知られています。インドでは「ブッダ」は覚者一般をさす普通名詞として使われ、仏教の開祖個人をさす時は、その人の家系の名（性）をつけて、ゴータマ・ブッダというのが、より正確な呼び方だそうです。　（ブルーガイドインド編より）

英国春秋歌壇

旅の終わりに

ペイン瑠美子

みちのくの旅の終わりに訪れし
　　啄木館は小雨に濡れおり

千曲川橋を渡れば小布施なり
　　陽射しの強き信濃の１０月

コスモスの疎らに残る道端に
　　小布施の秋は静かに暮れゆく

やわらかき秋の陽射しのぬくもりを
　　とかげも知るや岩のうえ

にぎやかに鳴き交わしつつ雁の群れ
　　屋根の真上を飛び去りにけり

晩秋の空にかかるや昼の月
　　凍りたるごと寒風吹けば

風もなき庭を横切る子狐の
　　啼く声悲しくやみに消えたり

舞い狂う落ち葉に猫のたわむれて
　　静かに過ぎる午後のひととき

Scotland Decided

一日本人の見たスコットランド独立キャンペーン

野口善男

9月14日にスコットランドの独立を問う住民投票が行われましたが、その結果は独立しないでUKに残ることになりました。長らくスコットランドに住んでいた者としては、スコットランドの事情や人々の気持ちも良く分かりますので、このキャンペーンの期間中 複雑な気持ちで成り行きを見守っていました。
「複雑な気持ち」とは こういうことです。心情的には独立させてやりたいのですが、でも本当に独立したら現実問題として経済的にも政治的にもやっていけるのだろうか。北海の油田があるから大丈夫と独立派は言いますが、産出のピークはとっくの昔に過ぎています。
独立すればイギリス政府からの有形無形の支援もなくなり、却って人々の生活は今より苦しくなる恐れがあります。独立すれば“better off“と言っておりますが、暫くの間は”worse off” になることは独立派自身も認めている位です。わざわざ損をすることが分かっているのに－－－。それでも独立したいと言うのですから、これはもう理性ではなく感情的になってしまっているとしか思えません。

300年前イングランドに併合されて以来の積もりに積もった恨み つらみ－－－親から子に綿々として伝えられてきたことが爆発した、昔だったら戦争になっていたかも知れませんが、現代ですから民主的なプロセスをたどった と言うのが今回の出来事と個人的には思っております。
スコットランドやスコッツを 揶揄したりバカにしたりする場面にはしょっちゅう遭遇しますし、からかいの対象としてのジョーク集や本など枚挙に暇がありません。私に言わせれば「人種差別」も いいところ、スコッツが気の毒でなりません。それが冒頭に「複雑な気持ち」と言ったゆえんです。判官贔屓という面があることは否定しません。

しかし乍ら冷静になって普段の日常の生活を振り返ってみると、実はもう既にスコットランドは独立していると言うか、イングランドとは違うシステム、制度でやっていることが沢山あります。何もワザワザ独立なんて言わなくてもいいんじゃないかと思うことがあります。以下その例です。先ずおカネ。スコットランドにはポンド紙幣を発行する銀行が３つもあります。Royal Bank of Scotland, Bank of Scotland, Clydesdale Bank です。

スコットランドでも女王様が印刷されているBank of Englandの紙幣が流通していますが極々僅かで、圧倒的にこの三つ銀行の紙幣が出回っています。地方の片田舎で買い物をしてお釣に女王様の紙幣をもらった記憶がないくらいです。
勿論この紙幣はイギリスの中央銀行であるBank of Englandの監督の下で発行されています。しかしLegal tenderではないので国際的には認められておらず、成田空港では両替してもらえません。またロンドンのお店などでも受け取りを拒否されることもあります。店員さんがイギリス人でないとスコットランドのことなど知らないので、ニセ札と思うのでしょう。
また法律もスコットランドは違うところがあります。スコットランドに工場を設立するに当たって、本社の指示でロンドンの法律事務所に依頼に行ったら、スコットランドとは法律が違うので自分たちには出来ないと断られました。家屋の賃貸、売買に関する法律も違うようです。私がロンドンに出てきて経験したことです。家を借りることにして契約しました。そうしたら前日になって値上げを言ってきました。値上げを飲まなければご破算に

するというわけです。（Gazumping）スコットランドではこういうことは絶対にありません。Binding contract と言って一旦契約したら破棄することは出来ません。
警察法や刑法にも違があるそうです。婦女暴行罪で訴えられても女の人が挑発的、扇情的な身なりや態度だったら それは女の方が悪い、となるとか－－－。運転免許に関する法律も違いスコットランドでは、16 才から取得出来ます。（普通は 18 才）
教育制度も違います。スコットランドの大学の授業料はスコッツなら無料です。深く知ってるわけではありませんが中等教育についても違いがあるようです。このように かなりのところでイングランドとは違っています。

イングランド それを許容していました。ですから今更 声高に「独立」を叫ばなくても自分たちのやり方でやっているんだから 良いじゃないかとも思います。それなのに「独立」とは－－－やはり民族の血が騒ぐとしか思えません。

ところでエジンバラから少し南に行ったところの小さな村に、トラキア・ハウスと呼ばれるお邸があります。当時その界隈を支配していた部族の長の館ですが。博物館として見学することが出来ます。但し正面の門からは入れません。この門は「開かずの門」と言われ、鉄製の大きな扉には鍵が掛かったままだからです。それはご先祖様の遺言が家訓となっていて、「スコットランドが独立を果たした暁に 開けるべし。それまでこの扉を開けることは罷りならぬ」とされてるからなんだそうです。

今度の投票の結果が YES だったら門が開くので見に行こうと思っておりましたが、お預けになってしまい、ちょっと残念な気もしております。でも NO となったおかげで、これからもパスポートなど持たずに、又お金も換えずにスコットランドに行けるのでホッとしたと言うのが偽らざるところです。
それにスコッツにしても経済的に損をすることもなく、政治的にも有利な立場を確保出来たし、一方、分離を阻止出来たイギリス(UK)も世界に対して面目が保てたので良かったと思っているところです。

英国春秋あれこれ

９月１９日早朝ニュースを聞いてほっとしました。スコットランド独立選挙は他人事ではないように思えたからです。もし独立したら私のスコットランドの年金会社はどうなるか、ポンド安の株安で私の少ない資産は消えてしまわないか、彼らのいなくなった UK は今まで通りの国威を、特に対外的に保てるのか（大樹のかげの方が雨露を防ぎやすい）、ネッシーに会いに行くのにもパスポートが必要か・・・等々の心配事が山積み。それらが“独立 No”の票５５％で一挙に解決しました。自分の利益ばかりでなく、もちろん違った角度からも色々考えてみました。それらについては既に多くの偉い方々が指摘されていますのでここで改めて書くこともないと思いますが、今回の選挙は結局、スコットランドの人々の「勝利」で終わったように思えてなりません。すでに多くの自治権を取得している上に、今回ウエストミンスターから出された公約が種々あり、また、独立によるリスクも回避されましたので、「負けて勝」を目の当たりにした感ひとしおです。老獪なスコッツはすべてを見通していたのかもしれませんね。それにしても SNP はよく頑張りましたね。丁度一年前の秋号で、「SNP　霞を喰らって　国造り？」と下手な川柳を載せましたが、とんでもない SNP は霞の代わりに、パンとミルクと蜜までも人々に用意したようです。

『英国春秋』　2014年秋号　（No 25）
編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　　c/o　JEIB
3 London Wall Buildings,
London EC2M 5PD

原稿の送り先　ogawa@japanassociation.org.uk 又は
Mrs M Hodgson 492 Canterbury Way, Herts. SG1 4ED